田楽屋のぶの店先日記2
～深川人情事件帖～

皐月なおみ　Naomi Satsuki

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

田楽屋のぶの店先日記２
～深川人情事件帖～　5
番外編　まるの一日　249

田楽屋のぶの店先日記2

～深川人情事件帖～

第一章　はるうらら

深川、富岡八幡宮の門前町、中島町にあるのぶの田楽屋は、今日も常連客で賑わっている。

「のぶさーん、田楽ふたつ、菜飯つきで！」

「はーい！　ただいま」

「こっちは田楽みっつね」

昼どき、九つである。

飯台ふたつと小上がりがあるだけの狭い店の中は、味噌だれが焦げる香ばしい匂いでいっぱいだ。客たちはあつあつの田楽に、はふはふとかぶりついている。

置いているのは田楽と菜飯だけ。

昼前から始めて、その日の分を売り切ったら終いという愛想のなさだが、八幡宮の参詣客たちに重宝されて店は存外に繁盛していた。

通りに向かって置いてある年季の入った長火鉢にずらりと並ぶ田楽を、のぶは慣れた手つきでひっくり返す。豆腐はあらかじめ揚げてあるから、そのままでも十分にこくがある。中まで熱を通して少し焦げ目をつけると出来上がりだ。たれが炭火に落ちてじゅわという音がした。

その間も、通りを行き交う人から声がかかる。

「田楽ふたつくださいな」

「はい、ただいま」

串を打ってある田楽は、八幡宮への行き帰りに歩きながら食べるにはもってこいだ。店の中で食べるより、持って帰る客のほうが多い。

ここのところの春らしい陽気につられて、通りは賑わい田楽屋も大忙し。ひとりで店を切り盛りしているのぶは休む暇もない。

焦げ目がついた田楽を火鉢から下ろし、胡麻をひとつまみぱらぱらとまぶす。あらかじめ拵えておいた菜飯の椀を並べて出来上がりである。

「はい、お待ち」

小上がりで今か今かと待っている客のところへ持っていくと、ふたりはうれしそうに声をあげた。

「うへ、うまそう」

「いい匂いだな」

さっそくパチンと手を合わせて田楽にかぶりつく。
「んめ～」
たまらずにうなるのがうれしくて、のぶはふふふと笑みを浮かべた。
「ありがとうございます」
八つを過ぎると、少し客足が落ち着いて、店の中は数人の客だけになる。
小上がりで田楽にかぶりついているふたり組の客の前に、のぶは麦湯を置いた。
「いつもありがとうございます」
手拭いを頭に巻いた年嵩の男と若い男は、ひと月ほど前から近くの寺の普請に来ている宮大工とその弟子だ。ここの田楽が安くてうまいという評判を聞いたらしく、仕事の合間にちょくちょく食べにきてくれる。
「お、ありがとうございます。それにしてもここの田楽はうまい。だいたい巷で評判の店とくら、気位ばかり高くて肝心の料理はてぇしたことがねぇってことがほとんどなのに、ここの田楽は正真正銘天下一品でさぁ。勧めてくれた仲間に感謝です」
親方がうまそうに麦湯をすすった。
「親方、おかみさんが持たせてくれる昼餉よりうまいって口を滑らせたから、おかみさんカンカンなんですよ」
菜飯を頬張る弟子が隣で軽口を叩く。

「余計なこと言うんじゃねえ」
親方が彼の頭を軽く張った。
「いて。でも明日から食べられなくなると思うと寂しいです」
弟子の言葉に、のぶは目を見張った。
「食べられなくなるって、因速寺さんのお仕事はもうおしまいですか？」
「へぇ、明日からは京橋のほうへ行きやす」
「そうですか、それは寂しくなりますね」
店が繁盛するのもうれしいが、馴染みの客の顔を見てこうやって話をするのも、のぶの楽しみのひとつである。
宮大工とこの弟子のやり取りは、まるで仲のいい親子を見ているようで好きだった。もう見られないのだと思うと残念だ。
「また冨岡さんに行くときに、寄らせてもらいますよ。そのときはうちのかかあも連れてきやす」
「ぜひ、お待ちしております」
長火鉢の前に戻り、青菜を担いだ野菜売りやむきみ売り、通りを行き交う人の流れを見つめていると、八つ半の鐘が鳴る。
途端にのぶは落ち着かない気持ちになった。

ここのところは毎日そうだ。そわそわとしながら、人の流れに目を凝らすが、目当ての人物はまだ現れない。代わりに見知った顔を見つけてのぶは彼を呼び止めた。

「親分」

このあたりを縄張りにしている岡っ引きの菊蔵だ。

「こんにちは」

もとよりここへ寄るつもりだったのだろう。今年五十になるとは思えない軽い足取りで、のぶのところへやってくる。

強面の顔に似つかわしくない柔和な笑みを浮かべた。

「こんにちは、のぶさん。そろそろ朔太郎が寺子屋からけぇってくる頃合いですかい？」

彼は、今年二十三ののぶが女手ひとつで店を切り盛りしているのを気にかけ、三日と空けずにここへ顔を出してくれる。

のぶの事情をよくわかっていて、今のぶがなにを気にしているのかも、お見通しだ。

「そうなんです。もうすぐだと思うんですが。なんだかそわそわしちゃって」

「そういうもんですよ。うちのかかあも初めの子の頃はそうでした。これが二番目三番目になってくると、どーんとかまえられるようになるんですがね。ちょいと見てきましょう」

「そんな、親分のお手をわずらわせるほどでは」

「いや、ちょうどあちら側に行くところですから、見かけたら声をかけておきますよ」

気楽に言うと、菊蔵は永代橋のほうへ歩いていく。

見送るのぶに、店の中の常連客から声がかかった。

「のぶさん、殿ちびちゃんがどうかしたのかい？　そういえば今日は姿が見えないな」

近くの湯屋のご隠居だ。息子に代を譲り悠々自適の毎日で、ここへはしょっちゅう食べにくる。

常連客たちから『殿ちびちゃん』と呼ばれている、のぶの息子朔太郎は、少し前までこの時間は客たちに混じって昼餉の田楽を頬張っていた。

いつもいた小上がりには、今は飼い猫のまるだけがつまらなそうにあくびをして丸くなっている。

「十日ほど前から寺子屋に通い出したんです。そろそろ帰ってくる頃合いなんですが」

朔太郎が通う寺子屋は堀をいくつか渡った先、伊勢崎町にある。

朝、八丁堀へ仕事に行く亭主の晃之進が送っていき、昼餉を向こうで食べたあと、

年嵩の子に付き添われてこのくらいの頃に帰ってくるのだ。
のぶはそれを今か今かと待っている。どこかで危ない目に遭っていないか、道を間違えて迷子になっていないかと気が気ではない。店を放り出して見に行きたいくらいである。
「へぇ、寺子屋へ？　もうそんな年になるかな。昨日ここへ来たばかりのような気がするけど。もう七つかい」
「そうなんです。早いですね」
朔太郎とのぶに血の繋がりはない。
わけあって、彼がここへやってきたのが、四つのとき。紆余曲折を経て一年後に正式にのぶと晃之進の子になった。
それから二年、あっという間だった。
「子どもはすぐにでかくなるなぁ。おれもじじいになるはずだ。うかうかしてたら、すぐにあの世から迎えがくる」
「まぁ、ご隠居さんのところへはまだまだ来ませんよ」
そんな話をしていると忙しなく人が行き交う中に、小さなふたり組の姿が現れる。のぶは声を張り上げた。
「さく、よっちゃん、おかえり！」

小さいほうが、うれしそうにぶんぶんと手を振った。
「かかぁ！」
朔太郎である。このところ背が伸びて、去年仕立てた着物は袖が少し短くなっている。目方もずしっと重くなって、もはやのぶでは抱き上げることも容易ではない。
ここに来たばかりの頃は、白い大福餅のようだった頬は、少年らしく少し引き締まり、毎日日が暮れるまで外で遊んでいるだけあって、こんがりと日に焼けている。
彼の手をしっかりと握っているのは十になる米問屋の娘よしである。まだひとりで帰るには心許ない朔太郎に毎日付き添ってくれる。
店があり迎えにいけないのぶは大助かりである。
ふたりの姿を見て、のぶはようやくほっと肩の力を抜いた。
家から寺子屋までの道のりは、昼間は人の通りが絶えないから、めったなことは起きないと周りは言うが、それでも何かあったらと気が気ではない。本心では行きも帰りも付き添いたいくらいなのだ。
だが、店があるとそうはいかない。店をかまえて六年経つが、初めてのぶは自分の商売を恨めしく思っていた。
「よっちゃん、今日もありがとうね。ささ、お座り」
のぶは店の外へ出てふたりを迎え、店先に並べてある腰掛けに座らせる。そしてあ

らかじめ用意しておいた田楽を握らせた。
子ども用に水飴を加えてたれを少し甘くして冷ましたものだ。
「ありがとうございます」
よしが行儀よく言って、ふたりは田楽にかぶりつく。昼餉は寺子屋で食べてはいるが、いくらでも腹が減る年ごろだ。
まるがにゃーんと鳴いて朔太郎の足に絡みついた。朔太郎が寺子屋に通い出す前は、四六時中一緒にいたので寂しいのだろう。
朔太郎がなでてやるとゴロゴロと喉を鳴らして甘えている。
のぶはふたりに問いかけた。
「今日はどうだった？」
「まぁまぁだ」
口をもぐもぐさせながら朔太郎が答える。なんとも要領の得ない内容だ。
「まぁまぁって……なにがあったのか聞いてるの」
「なにがってなにが？」
「今日はさくちゃん、『い』をたくさん書いていました。そのあと昼餉を食べました」
「そう、ありがとう。よっちゃん」
本人に代わって、よしが朔太郎の様子を教えてくれる。

毎日同じようなやり取りを繰り返しているから、気にかけてくれたのだろう。自分の手習いもあるだろうにしっかりしてると感心する。
三つ違うとこうもしっかりするものだろうか。
「昼餉のあとは、小さい子たちは鬼ごっこをしていました」
朔太郎が通う寺子屋では、まだ小さい歳の子たちは、一日中手習いをするのではなく昼餉のあとは遊ぶ時間がある。楽しく通ってほしいという師匠の方針だ。
寺子屋での様子を知りたくて朔太郎にあれこれ聞くと、返ってくるのは「走った」だの「かげふみをした」だの、遊んでいたと思しき言葉ばかり。
よしがいなくては本当に手習いをしているのかと疑ってしまうくらいだ。
「いつもありがとうね、よっちゃん。よっちゃんも算術進んでる？」
「はい。今日は難しい問いをやりました」
しっかり者の彼女は算術が好きなようで、このところ同じ年の子より難しい問いをやっている。「女の子なのに」と母親は嘆いていたが、結構なことだとのぶは思う。商売人に算術は欠かせない。
あっという間に田楽を食べ終えて、よしは「また明日ね」と朔太郎の頭をなでて帰っていった。
朔太郎もひょいと腰掛けからおりる。

「遊んでくる！」
「はいはい、七つ半の鐘が鳴ったら帰ってきてね。小さい子には優しくね。乱暴なことは……」
「わかってらい！」
朔太郎は元気に答えて、まるを連れてかけていった。
この時間は裏店の子らが、裏の通りで遊んでいる。そこに合流するのだろう。
見送ったのぶは、腰掛けに手習い用の紙や筆が入った風呂敷包みがそのままになっているのに気がついて、やれやれとため息をついた。
また忘れている。寺子屋から帰ってきて遊びに行く際は、必ず荷物を二階へ置いてから行くようにと約束している。
しかし、寺子屋へ通い出して十日、まだ一回も守られていなかった。
仕方のない子だと思いながらも、のぶの胸があたたかくなる。朔太郎が家でのびのびと過ごしているのがうれしいのだ。
朔太郎が血の繋がった我が子なら、こんな風に思わないかもしれない。
だが、正式に自分の子となって二年経つものの、この癖はなかなか抜けなかった。
ここへ来たばかりの頃はおっかなびっくり、のぶのそばを離れようとしなかった彼は、今やすっかり近所に馴染み、あっちこっちに遊び相手がいる。晃之進が帰ってきて一緒に湯屋へ行くまでめいいっぱい遊んでいる。

殿ちびちゃんという呼び名のもとになったどこか浮世離れしていた口調も、遊び仲間といるうちに下町の子どもらしいものに変わった。
ここに馴染み、寂しさや憂いとは無縁の、子どもらしい暮らしを送れている証だと思うと、うれしい。
風呂敷包みを手に中へ戻ると、再びご隠居から声がかかる。
「のぶさんはえらいね。なさぬ仲の子をしっかり育ててるんだからさ」
「いえ、ありがたいと思っていますよ。こうして子を育てさせてもらえるのが」
しみじみそう思う。晃之進と一緒になって三年、子ができなかったところに、ある日ひょっこりやってきた朔太郎は、のぶからしたら天からの授かりもの。
血の繋がりがなくとも、いや血の繋がりがないからこそ、大切に育ててきた。
今となっては、朔太郎が来る前は、いったいなにを自分の幸せだと思って暮らしてきたのだろうと思うくらいだ。
「いや、それにしても立派だよ。なかなかできることじゃねぇ」
なさぬ仲の子を育てる親など、この江戸の町には五万といるのに、ご隠居がその中でも特に感心してしみじみと言うのにはわけがある。
彼は朔太郎を晃之進が他所でこさえた子だと思っているのだ。だが、それはまった

くの間違いだ。朔太郎は亭主の晃之進とも血の繋がりはない。

それなのに、近所で囁かれている『のぶさんは自分に子ができなかったから、亭主が他所でこさえた子を育てている』という不名誉な噂をのぶがあえて否定しないのは、やや込み入った事情があるからだ。

そもそものぶと晃之進が、わけありの夫婦である。

晃之進は、南町奉行所の隠密廻同心、安居倉之助の弟である。

隠密廻同心という役目は、江戸の町の事件解決に奔走する花形の役目である。

次男であり家を継ぐ立場にない彼は本来なら他家へ養子へ出る身だったが、有能な彼を重宝がる兄・倉之助の求めに応じて彼の手先を務めていた。

のぶは両親亡きあと、十歳の頃より安居家の下働きをしていたが、十七の頃、成り行きで晃之進とわりない仲になった。

それが倉之助の知るところとなり、ふたりは倉之助公認の『かけおち』という形で、ここ深川、中島町にて一緒になったのである。

本来なら、下女が主人の弟と、わりない仲になるなど言語道断。身ひとつで放り出されても仕方がないところ、こうやって身が立つようにしてくれた倉之助にのぶはとても感謝していて、安居家を離れたあとも変わらず忠誠を誓っている。

同心の手先という晃之進の仕事は近所では大っぴらにしていない。だから、彼の不

在はさまざまな憶測を呼ぶ。

のぶは近所から『かけおちまでして一緒になったのに、亭主が家にいつかない可哀想な女』と謗られることもあった。

そんな晃之進がある日突然朔太郎を連れてかえってきたのだから、どこぞで拵えた子をのぶに育てさせるためなのだと思われたというわけだ。

その朔太郎もまた、わけありの子だ。

朔太郎は、さる藩の藩主の嫡男だ。

本来なら一国の城主となる身であるが、母親は正妻ではない上に身分の低い女で、正室との兼ね合いから世子として届け出るには差し障りがあった。

彼の実父は朔太郎を大切に思ってはいたが、悩んだすえに世子とはせず、秘密裏にのぶと晃之進の子として育てさせることを決断した。のぶと晃之進は、必ず彼を幸せにすると約束したのだ。

事情が事情だから、万が一にでも、彼の出自が世間に知られないように、のぶは不名誉な噂をそのままにしているというわけだ。

のぶを妹のように可愛がってくれる倉之助の妻りんは、こんな状況を可哀想と同情するが、本当に気の毒なのは晃之進だとのぶは思う。やってもない罪を着せられているようなものなのだから。

けれど朔太郎のためならば少々の不名誉など、どうということはないと、夫婦の気持ちはひとつだ。

「とはいえ、殿ちびちゃんはのぶさんの立派な後継になってくれそうだ。そう考えるとありがたいな。まだ串打ちはやってるのかい？」

「ええ、毎朝やってくれますので大助かりです」

朔太郎はここへ来たときから、のぶが田楽を作るのに興味津々だった。

田楽の串打ちをやりたがるので試しにやらせてみたら存外にうまくしっかりとやるので、今や彼の仕事となっている。

それは客たちにも知られているから、すっかり後継だと言われるようになったのだ。

「ここの田楽はもうこのあたりの名物だから、長く続けてくれないと皆がっかりするよ。しっかりした息子がいれば安泰だ」

そう言って隠居はからからと笑った。なにをしてるかわからない亭主より、頼りになる息子がいてよかったねということだ。

隠居が帰る頃にはその日の分の田楽は売り切れる。店じまいをしていると、店先から声がかかる。

「のぶ」

「あ、さっちゃん、はなちゃん、こんにちは」

のぶの幼なじみさちとその子、はなが手を繋いで立っている。

「いらっしゃい。どうぞ」

のぶは布巾（ふきん）で手を拭いて店の中にふたりを促す。そしてはなの前にしゃがみ込み両手を広げた。

「はなちゃん、おいで」

「のぶたん」

腕の中に飛び込んできたはなを抱き上げて、ふわふわのほっぺに頬ずりをする。

はなは、生まれてすぐからしょっちゅうここへ来ているから、もはや自分の子のような存在だ。

はなのほうも、ここへ来るとのぶに思う存分抱っこしてもらえると心得ていて、まずはこうやってのぶの腕に飛び込んでくる。

のぶは、はなの髪に顔を埋めて彼女の匂いを吸い込んだ。小さい子は、どうしてこんなにいい匂いがするのだろう。

すべすべの頬に口づけて、ぷうとやると、はながきゃっきゃと声をあげた。

さちのほうは、やれやれといった様子で首を回して小上がりに腰を下ろした。

「はー、やっと気が休まる」

「おつかれさま」

のぶは労いの言葉をかけた。
さちは近くの八百屋に嫁いでいて、少々口うるさい姑がいる。
家では店番に子どもの世話にと休む暇がないのだろう。ここに来たときだけがゆっくりできるといつも言っていた。
はなが生まれる前は毎日来ていたけれど、生まれてからはさすがにそういうわけにはいかず、数日ごとに姑の目を盗み、はなの散歩がてらやってくる。
救いは、連れ合いはそんなさちの味方だということだ。
田楽屋で出している菜飯に使う菜葉は彼女の店から仕入れていて、丁稚が毎日持ってくるが、お裾分けとして、かぶやら瓜やらがちょくちょくくっついてくる。うちの妻をよろしくという意味だろう。
「あられがあるけど食べる？　はなちゃん好きだよね」
ほっぺをすりすりしながらそう言うと、はなが可愛く首を傾げた。
「とのたんは？」
可愛い仕草に、のぶの胸はきゅんと跳ねる。
この年ごろの子はなにをしていても可愛いものだが、なんといってもはなは格別。
なにせのぶは彼女が生まれる前からむつきを縫い、生まれてくるのを今か今かと待ちわびた。生まれてからは、それこそここへ来たときは、我が子のように世話をした。

朔太郎もまたはなを可愛がり、ふたりは兄妹のように育った。
はなは彼を『とのたん』と呼び、姿を見るとまるとまると一緒についてまわる。
「とのたんはね、遊びにいっちゃった」
答えると、はなは可愛い眉を八の字にした。ここへ来たら遊んでもらえると思っているから、がっかりしたようだ。
「とのたん……」
「はなちゃんもあとで行こうね」
その言葉がわかっているのかどうなのか、彼女はいやいやと首を横に振る。
「とのたん、とのたん」
「わがまま言わないの。ちょっとはかかも休ませて」
さちはすぐに連れていってやる気はないようで、小上がりに腰を落ち着ける。
その隣にはなを座らせ、のぶは小皿に乗せた豆腐のあられを持ってきた。
「はなちゃん、どうぞ」
はながぱぁっと笑顔になり、ぱちんと小さな手を合わせて、かりこりと食べはじめた。
豆腐を揚げて作るのぶ特製のあられは、はなの好物である。のぶは彼女がいつ来てもいいように、毎日作るようにしていた。

はながおやつを食べている間は、母親同士のおしゃべりの時間だ。
「殿ちびちゃん、寺子屋のほうはどう？」
「元気に通ってる。ちょうど同じ時期に通い出した同い年の子がいるみたいで、楽しそうだよ。でもなんか、私のほうが慣れなくて。毎日無事に帰ってくるまで落ち着かない」
「あーなんかわかる。私もはなの姿が見えないと落ち着かない」
考えてみると、彼を育てるようになってから、こんなに長い時間離れているということ自体が初めてなのだ。そのうち慣れると周りは言うが、今のところそんな感じはまったくない。
「殿ちびちゃんの寺子屋ってちょっと遠いから余計でしょ」
「そうそう、道は危なくないはずなんだけどね」
このあたりの子どもたちは、たいてい近くの西念寺で開かれている寺子屋に通う。けれど朔太郎が通ってる寺子屋は、伊勢崎町にある若い侍が開いている寺子屋だ。離れているぶん帰ってくるのがこころの子よりも遅い。だから余計に気にかかるのだ。
朔太郎をどの寺子屋へ通わせるのか、のぶは少し悩んだ。
彼はのぶと晃之進の子だが、出自が出自だからすべてをふたりで決めるのは差し障

りがあるかもしれないと思ったのだ。
結局倉之助に相談し、勧められたのが伊勢崎町の寺子屋だったのである。
「そこって若い師匠なんでしょう？」
「うんそう。いい方だよ。さくはすぐに懐いて、試しに連れていったときに絶対ここがいいって自分で決めちゃった」
安江又三郎という若い師匠は仙台藩の藩士の三男だが、事情があって国許から江戸に出てきているという。二年前から藩邸の近くの空き家で寺子屋を開いている。
当初は藩の子だけを教えていたようだが、堀の向こうの今川町からも子が来るようになり、今は侍の子と町人の子が半々だ。
本人はやや線が細く侍らしくないという印象だが、その分優しく子ども思いだ。寺子たちからは、『また先生』と好かれていて、いつも誰かしらがくっついている。
「寺子半分がお侍の子だから、肩身の狭い思いをしないかと心配だったんだけど、そうでもないみたいで安心した」
寺子屋とひと口に言っても、その形式は千差万別。侍の子だけを受け入れるところ、町人だけのところ、学業吟味の準備のための学問所。
子や親の身分が違えば、それだけ摩擦があるものだろうと心配したが、又三郎のところはうまくいっていると評判だ。教えてもらえる内容も、寺子ひとりひとりの性格

と身分や将来に合わせて又三郎が考えるという。
「楽しそうなところなら、はなもそこに通わせようかな。西念寺は子どもがいっぱいで小さな子までは手が回っていないって話だし」
「え、はなちゃんはまだ気が早いでしょ」
のぶは飲んでいた茶を噴き出しそうになった。
「だけどさ、考えておくに越したことはないでしょう。姑なんかもっと気が早くて嫁ぎ先はどこがいいとか、そのためになにを習わせようかとか言ってるの」
そこまで言って、さちはおかしそうに肩をすくめた。
「おかしいよね。子どもの頃は親が手習いのことにあれこれ言うのが心底うっとうしかった。なにをそんなに心配してるんだろうって思ってたけど、いざ自分が親になったら、その親より心配してるんだもん」
「だね」
朔太郎が放り出していった風呂敷包みに目をやって、のぶはくすくすと笑った。そういえば、のぶもまだ健在だった頃の親にはあれこれうるさく言われたものだ。
やれ、筆は丁寧に使えだの、早く帰って来いだの。口うるさいと思ったものだが、それを今は自分が言っている。
「いくらなんでも嫁ぎ先なんて早すぎるし、そんなのどうなるかわからないけど、で

もわからなくもない気もする」
そう言ってさちははなの頭をなでた。
「どうなるかわからないからこそ、どうなってもこの子が困らないようにやれることをしてあげたいと思うんだよね」
その言葉に頷きながら、のぶは通りに目をやった。
どこから来たのか、桜の花びらがちらちらと舞っている。店先から日差しとともに差し込む、春の陽気の匂いを感じた。
新しい日々が始まるのだ、とやや唐突に感じた。
これまでのぶは、朔太郎を自分の手元で片時も離さず大切にして、元気で笑ってくれることだけを考えてきた。
腹をいっぱいにして、安心して眠ってくれたら、それでよかった。
けれどこれからはそうではない。
少しずつ手を離れ、ここではない場所で学び成長する。
将来どうなるかわからないからこそ、親として、やれることをしてやりたい。やらなければならない。
かりこりとあられを食べるはなの頭を見つめながら、のぶはその重みを胸にずっしりと感じていた。

第二章　深川めし疑惑

田楽屋に義姉のりんがやってきたのは、さちが来た次の日のこと。

のぶがその日の分の田楽を売り切ったときだった。

通りの向こうにこちらを窺う彼女の姿を見たのぶは、はじめ見間違いかと思った。のぶの記憶にある限り、りんが八丁堀を出たところは見たことがない。

よく似た武家女かと思ったが、目が合うと彼女はほっとしたように表情を緩めて、ささささとこちらへやってくる。

「義姉上さま！　どうされたんです？」

「のぶ、今いいかしら？　少し話があって……」

とりあえず店の中に招き入れ、店を閉めてすぐに尋ねる。

彼女の夫、倉之助は南町奉行所の隠密廻同心である。家族の誰かにのっぴきならぬなにかが起きたのではないかと思ったのだ。

そのあたりはりんも心得ていて「誰かになにかあったわけじゃないのよ」と、まずはのぶを安心させる。

その言葉に、とりあえず安堵して、のぶは小上がりに彼女を促し麦湯を出した。

そして自分も隣に腰を下ろす。

火急の事態ではないとはいえ、わざわざ来るくらいなのだ。それなりに深刻な話だろう。店の仕事をしながら聞くわけにはいかない。

「今日は倉太郎ぼっちゃまは？」

どこか所在なさげな彼女に、とりあえず問いかける。

倉之助とりんの息子倉太郎は、十一歳である。留守番くらいはできるだろうが、そもそもりんが彼を置いてひとりで出かけたことなど、のぶが知る限りはない。

「道場の子たちとお花見に行ってるのよ。帰ってくるのは夕方って言ってたわ。そういえばぼうやは？　まだ寺子屋？」

「いえ。帰っておやつを食べたらすぐ遊びにいってしまって」

小上がりには朔太郎が放り出していった風呂敷包みが転がっている。

今日こそは、荷物を二階に置いてから出かけるように言おうと思っていたのに、ちょうど注文が入り、そちらに気を取られているうちに、風のように行ってしまったのだ。

「風呂敷包みを放り出したままで」

りんがふふふと笑った。

「どの子も一緒ね。倉太郎もいまだにうるさく言わないと忘れるわ」
けれどすぐに笑みを消し、湯呑みに視線を落とす。
のぶはそれ以上はなにも言わずに彼女の言葉を待つ。
ややあって、りんは思いきったように口を開いた。
「あのね、のぶ、ちょっとのぶに相談があるのよ」
気を引き締め、のぶは神妙に頷いた。
「話っていうのはね、その……旦那さまのことなの」
旦那さま、すなわち倉之助だ。
「ここのところなんだか様子がおかしくて」
「……お身体が悪いのですか？」
「いいえ、そうではないの。そうではなくて……」
どこか歯切れの悪い物言いだ。
「ここのところ、夜に出かけてお酒を召し上がって帰ってこられることがときどきあって」
「それは……お役目ではなく？」
隠密廻同心の役目だということを隠して酒を出す店に行くことくらいはあるだろう。
もちろん、ひとりではなく上役や同輩と飲みに行くこともあるだろうが、それだっ

てほとんど仕事のようなもの。
そんなことは、りんだって承知だろう。今さらどうこう言うような女ではない。
「違うような気がするのよ」
そこで、りんは両手を胸の前できゅっと握りしめる。そんな仕草は、まるで娘のようだ。
「……他所に、女の人ができたのではないかしら？」
「まさか」
とっさにのぶの口から出たのはその言葉だった。
女の勘はあたると巷では言うし、一番近くで倉之助を見ているりんが言うならば、普段とは違うなにかはあるのだろう。
それでも、倉之助に女が……というのはどうもしっくりこなかった。
倉之助をひと言で表すならば、実直。
若い頃からあちこちで浮き名を流していた晃之進とは逆に、浮いた話はひとつもなく、お役目ひと筋。
その倉之助が惚れ込んだのがりんである。裁縫（さいほう）の師匠のところへ通う彼女を道で見そめ、見合いの話を持ち込んだ。
りんは同じ同心の家の長女で、当時すでに別の見合い話がまとまりかけていたと

いう。

だが倉之助は諦めなかった。往来でりんを待ち伏せし直談判、『嫁に来てくれ』、『生涯大切にする』と堅物とは思えぬ熱量でかき口説いたのだという。

初めは驚くばかりだったりんも次第に絆され、倉之助との縁談を望むようになった。そしてふたりはめでたく夫婦とあいなったのである。

のちにその話を晃之進から聞いたのぶは、驚いたものだ。

普段の倉之助は堅物そのもので、そんな素ぶりを見たことはなかったし、りんも夫を立て姑を大切にする、慎ましやかな武士の妻そのものだったからだ。

その片鱗を見たとすると、まだ安居家にいた頃、のぶと晃之進の関係が明るみになり騒ぎになったときだろうか。

妹のように可愛がっていたのぶに手を出した晃之進に怒りをあらわにした彼女は倉之助にも食ってかかり、離縁までちらつかせたのだ。

倉之助はいつもの威厳はどこへやら、あたふたして、彼女の怒りを鎮めようと必死だった。

その姿を見たときに、倉之助の求婚話は本当だったのだと腑に落ちた。

そんなふたりを知っているのぶからしたら、倉之助が外に女を、という疑いは、どうもぴんとこない。

「あのお役目第一の旦那さまが……なにかの間違いではないですか」

「そんなのあてにならないわ。まさかあの人が、という人が下手人だったというのはよくあることでしょ」

隠密廻同心の妻らしく、下手人などという物騒な言葉をさらりと口にして、りんは唇を噛んだ。

「今までだって、私が知らなかっただけでずっと外に囲っておられたのかも」

「そんな……。少し様子がおかしいってだけですよね。義姉上さまの気のせいってことも」

「気のせいなんかじゃないわ」

彼女はのぶをきっと睨んだ。

「お茶のお友達が、少し前、夜の深川で旦那さまを見たって言ってたの。その日は朋輩の平田さまと飲みに行かれてたはずなのよ。でもおひとりだったって聞いたので、おかしいと思って私、あとから平田さまの奥さまに尋ねたの」

りんは一度言葉を切り、再び口を開く。

「そしたら、その日ご主人はどこにも行かれてなかったそうよ」

「ほ、ほかの方とご一緒だったかも……」

「そもそもおひとりだったのよ？」

よほど思い悩んでいたのだろう。一度口にしたら、止まらないように胸に閉じ込めていたものを吐き出している。

とはいえ、どれもこれもひとつひとつは、取り止めのないことだ。

「それにね、私見たの」

「見た？」

「旦那さまが、大切そうに文を胸元にしまうところ」

「文、ですか」

「綺麗な鶯色の紙だった。いかにも女の人が好むような……絶対にお役目のものじゃなかったわ」

だとしても、倉之助のお役目を考えると、そうとも言えないとのぶは思うが。

「でね、旦那さまはその文を大事そうに胸元に……そして『いつまでもこのままというわけには』と呟かれたの」

「『いつまでもこのままというわけには』……？」

不可解な言葉に、のぶの胸もざわざわとした。

「もちろん事件がらみということも考えられなくはないけれど……。最近の晃之進さまはどう？　うちの旦那さまのように夜出かけられたりするかしら？」

思いつめた様子で尋ねられて、のぶはたじたじになる。晃之進は倉之助の手先、一

心同体とは言わないが、同じ動きをすることもある。

申し訳ない気持ちでのぶは首を横に振る。

「帰りが遅いことはありますけど、事件が立て込んでいるということはなさそうです」

ここのところは、たいてい日が暮れる頃には帰ってくる。

「そう……」

りんが肩を落とした。

「義姉上さま、あまり考えすぎないようにしてください。旦那さまのお仕事は、世間並みに考えてはいけません。きっとなにかお役目に関わることですよ」

気休めにもならない言葉しか口にできないのがもどかしい。

夫の不貞を疑ってしまう状況がどれほどつらいか、のぶも身に覚えがあった。朔太郎が来たばかりの頃、晃之進の不貞を疑ってしまって心が痛かった。

一度不信感を抱くと、なにもかもが疑わしく思えるものだ。

りんはのぶにとって実の姉のような存在。両親が亡くなり、寂しくて仕方がなかった時期を乗り越えられたのは、安居家でりんが優しくしてくれたからだ。

彼女には、いつも幸せでいてほしい。

「蓋を開けてみれば、まったく見当違いだったってことも……」

当たり障りのない言葉は、りんの耳には届いていないようだった。
「うちの旦那さまは、お役目第一、私たちのことも大切にしてくださる。女のひとりやふたり、目をつぶらなくてはならないのは私もわかっているのよ」
胸の前で拳を作り、思いつめたように呟いた。
もはや倉之助の不貞は、りんの中で疑いえないものになってしまったようだ。
「だけどどんな方なのかくらいは、知っておきたいじゃない？　むしろそれは妻としての義務なんじゃないかしら」
「あ、義姉上さま、まだそうだと決まったわけじゃ……」
「だから、のぶに頼みがあるの」
手を取られてぎゅっと握られ、のぶは気圧されて口を閉じる。
「私と一緒に、旦那さまのお相手がどんな方なのか、調べてくれない？」
「へ？　調べる？」
「そう、のぶはそういうの得意でしょ？」
なんのことかわからなかった。
のぶは田楽を売っているだけの女である。夫の晃之進は同心の手先で調べものは玄人だが……
「うちの人に、頼んでほしいということですか……？」

りんが眉根を寄せた。
「そうじゃないわ、のぶ。晃之進さまに言ってはだめ。あの兄弟の仲の良さを知ってるでしょう？　絶対に庇うに決まってる。のぶは人がいいから言いくるめられておしまいよ」
倉之助と晃之進の兄弟の絆は固い。
倉之助は歳の離れた出来のいい弟をたいそう可愛がっていて頼りにしている。養子の話を断って手先にしたくらいなのだ。
のぶとのことを知ったときも引き裂くようなことはせず、かけおちという形で黙認した。
とにかく弟に甘いのだ。
晃之進も晃之進で、兄を慕っている。
父親が次男の晃之進にはあまり関心を向けなかった中、倉之助にはたいそう可愛がってもらったと感謝したように言っていた。いい養子の話は降るようにあったのに手先を続けていたのは、兄の役に立つのがうれしかったからだろう。
そんな彼が兄を裏切るようなことはしない、それどころか庇うかもしれないというりんの予想はあながち間違いではない。
「すでに知っていて黙っているのかもしれないわ、油断しちゃだめよ、のぶ」

「はぁ」
「信用できるのは私たちだけ。あの人たちには知られないように内密に調べなくては」
「だけど……私たちにできることなんてありますか？」
なんといっても相手は隠密廻同心である。
調べ物の玄人を、素人の女が内密で調べて、うまくいくのだろうか？
「あらのぶ。のぶは前にかどわかしを解決したじゃない。和泉屋さんの後継ぎ問題ものぶが収めたって聞いたわ」
「ええ！」
古い話を持ち出されて、のぶは目を剥いた。どちらも朔太郎が来たばかりの頃だったからもう二年も前のこと。
しかものぶが解決したわけではなく、たまたま成り行きで解決に繋がったというだけの話だ。
探るのが得意というわけではない。
「あんなのただの成り行きですよ。自分から調べたわけじゃありませんし」
首を横に振ると、りんが、ずいっと詰め寄り繋いだ手に力を込めた。
「お願いのぶ。私にはのぶしかいないの」

「あ、義姉上さま……」
「私も事を荒立てたいわけじゃないの。旦那さまを責めるつもりはないわ」
りんは真剣な表情で話し続ける。
「ただお相手がどんな方なのか知りたいだけ。どんな方かわかったら胸にしまい込んで、また妻の役割を果たします。のぶが旦那さまを裏切りたくないのはわかってる。のぶに手伝ってもらったことを旦那さまに漏らしたりしないから」
切実にそう言われては、のぶも弱い。
確かにのぶは倉之助に忠誠を誓っているが、どちらかというと心はりんに寄っている。
どちらの味方かと聞かれても選べない。選べないが、妻としての立場が同じ分、どうしても気持ちがわかるのはりんだった。
外に女を持つことが人でなしとまでは思わないが……
「だけど、調べるって言ってもどうやって？」
まったくの拒否というわけではないのぶの言葉に、りんはぱっと笑顔になる。
「ありがとう、のぶ。そうね、旦那さまのあとをつけるのが一番確実だと思うのよね。たとえば飲みに行かれるときに。でも夜は私ものぶも家を空けられないし」
「あ、あとをつける⁉」

りんの言葉にぎょっとする。

尾行の玄人の隠密廻同心を尾行する……なんてできるのだろうか？

「それは最終手段ね。旦那さまの行き先が深川なら、どこかで見た方がいないか聞き込みをするのはどうかしら？　それだったら、倉太郎が学問所に行っている間に私にもできるわ」

「き、聞き込み⁉」

さすがは奉行所に勤める与力や同心が住む町、八丁堀で生まれ育っただけあって、すでにどうやって調べるかあれこれ考えているようだ。

けれどそれはあまりにも無茶なやり方だ。

「待ってください、義姉上さま。それはだめですよ。そんなことをしたらすぐに旦那さまに知られます」

「あら、こっそりやるわ」

「それでも目立ちますって」

武家女が役人の動向を嗅ぎ回っているなど、すぐに噂になって八丁堀に話がいく。

「それに聞き込みなんて、うまくいくとは思えません。素人の女が手あたり次第に声をかけても、あやしまれて誰も相手にしませんよ」

「あら、そうかしら？　私だってうまいことやれるかもしれないわ。お茶の先生にも、

話し上手ねって言われるのよ」

武士の妻としてはしっかりしていても、こういうところは世間知らずだ。

「それにそもそも旦那さまが深川にいたのだって、女性と会っていたと決まったわけじゃないでしょう？　事件がらみかもしれないし」

それこそ倉之助自身が聞き込みをしていたのかもしれない。

「……まぁ、そうね」

唇を噛みうつむいて、りんは一応そう言った。

けれどまったく納得できていないのは、まるわかりである。

これはまずいと、のぶは思った。

ここで無理やり言いくるめても、納得できないまま帰したら、明日にでもひとりで聞き込みに行きそうである。

りんは、普段は常識のある武士の妻だが、頭に血が上ると突拍子もないことを考えて暴走するときがある。

「わかりました。とりあえず私から今深川界隈でぶっそうな事件が起きていないか、うちの人にそれとなく聞いてみます。事件があるなら旦那さまが夜に深川にいても不自然ではないですし。調べはじめるのはそれを確認してからでもいいでしょう」

りんが顔を上げた。

「そうしてくれる？　ありがとう、のぶ」
普段のぶは、晃之進にお役目のことを根掘り葉掘り聞かないが、近所のことや子どもに関わることは教えてくれるだろう。
亭主に隠しごとをするのは後ろめたいけれど……
「結果を待ってるわ、よろしくね、のぶ」
救われたようにそう言われては、もう頷くしかなかった。

「なんでぇ、のぶ。さっきからじろじろこっちを見やがって。おれの顔になにかついてんのか？」
向かい合わせに座りきんぴらごぼうを食べている晃之進が、怪訝（けげん）な表情でこちらを見る。
「いえ、なにも」
のぶは素知らぬふりで朔太郎の魚の身を剥いてやる。そしてまたちらりと彼を盗み見た。
後ろめたいのは、言うまでもなく昼間にりんと約束したことが原因だ。約束したと

いうべきか、させられたというべきか。
深川界隈で、奉行所が動くような事件が起きていないか、それを聞くことくらいはわけない。なにしろ近所のことだし、うちには寺子屋に通い出したばかりの朔太郎がいる。近所のあれこれが心配なのはもともとだ。
りんのことがなくても聞いておきたいくらいなのだ。
けれど、そこに別の思惑が混ざり込んでいては、なにやら気持ち悪くて後ろめたい。
夫婦とはいえなにもかもを明らかにするべきとは考えていないし、晃之進こそ、のぶに言っていないことくらいありそうだ、とは思うけれど。
とはいえ、聞けずじまいであれば、りんはひとりですぐにでも聞き込みをはじめてしまいそうだ。
などと考えながら、自分の魚をつついていると。
「おい、どこか具合でも悪いのか？」
また、晃之進の不審を買ってしまった。
どうも自分は隠しごとは苦手なようだ。ここはさっさと聞いたほうが得策だと思い、口を開いた。
「ええっと、おまえさん。最近ここらで、物騒な事件なんかは起きていないですか？」
もっとさりげなく聞こうと思っていたのに、やや唐突な感じになってしまう。ここ

らというのも曖昧だ。

りんの話だと、倉之助が女と一緒にいたのは入舟町のあたりのようなのに。

「いやここのところはねえよ。大黒屋のおかみが飼っていた三毛猫がいなくなったんで行方を探してほしいという、ふざけた届けが出たくれえかな」

晃之進は違和感を覚えたのか、一瞬不審そうな顔をしたものの答えた。

「本当なら門前払いだが、まあ今はそれほど深刻な事件はねえし、見回りのついでに気にかけてやってくれなんて言われたぐれえだ」

その答えにのぶは安堵とも落胆ともいえない気持ちで、「そうですか」と頷いた。

隠密廻同心の手先である彼が、三毛猫を探すくらい町が平和なのはありがたい。朔太郎が寺子屋へ通い出した今はなおさらだ。

けれど、それならば倉之助がりんに嘘をついてまで夜に深川にいたというのは不穏だ。まさか、三毛猫の行方の聞き込みをしていたわけでもあるまいし。

聞き込みでなくても見回りをしていただけかもしれないが、見回りは定町廻同心の役割のはずなのに……などとぐるぐる考えているのぶは、はっとする。

晃之進がまた不審そうにこちらを見ている。

ごまかすために、慌てて朔太郎に問いかける。

「さく、今日は寺子屋どうだった？　『いろは』は進んだ？」

とはいえ、これはのぶの気になるところだった。

よしからは昨日『い』をやっていたと聞いたから、ろか、はくらいまでは進んだのだろうか。

「今日はまるをかいた」

飯をもぐもぐとしながら朔太郎が答えた。

「え？　まるを？」

自分のことを言われているのがわかるのか、朔太郎の傍らで、まるがにゃーんとひと声鳴いた。

師匠の又三郎からは『い』からはじめて、一文字一文字進めていくと聞いていた。

それなのに『まる』と書けたということはものすごく進んだということだ。

「すごいじゃない。持って帰ってきた？　見たいな」

思い切り褒めると、ニカッと笑って立ち上がる。今すぐに持ってくるつもりだろう。

食事中に……とは思うけれど、晃之進も止めなかった。

のぶと同じで朔太郎の頑張りを早く見たいのだろう。

とととと可愛い足音を立てて朔太郎は二階へ行き、しばらくして半紙を手にして戻ってくる。そして、のぶと晃之進に見えるように開いた。

「まるだ！」

途端にがくっと肩を落とす。
そこにでかでかと描かれていたのは、確かにまる。
……まるだけれど、文字ではなく絵だった。
ふてぶてしいまるまるとした猫が、『にゃにか文句あるか』とでもいうようにこちらを見ている。
「あ、絵……」
晃之進が「お」と声をあげた。
「うめえじゃねえか。確かにまるだ。まるそのものだ。さくは絵師になれるかもな。……どうした、のぶ」
「いえ、字で書いたのかと思ったので」
「まずは筆をうまく使えるように慣らしてるんじゃねえか？」
そう言われればそうかと思う。
「墨を自分で磨ったぞ」と得意そうな朔太郎に、のぶは気を取り直した。
「しっかり磨れてる。黒々してるもんね。上手上手」
まだ七つの子の力では時間がかかっただろうにと思うと、頑張ったのは間違いない。
「それに、絵もうめえよ。このふてぶてしい目つきなんかそっくりだ」
「本当に、まるにしか見えませんね」

「ああ、大黒屋の三毛猫の姿絵もあれば、すぐに見つかるんだがな。よう、さく、もう一匹猫を描いてくれ」
調子のいいことを言う晃之進に朔太郎は頷いた。
「おん！」
さっそく夕食のあと、小上がりで絵を描きはじめる。
晃之進が、倉之助から聞いている大黒屋の三毛猫の特徴を朔太郎に伝えて、朔太郎が半紙に描いていく。
「尻のあたりに三本線があるそうだ。それから、耳はほかの猫よりちょいと大きい」
「こうか？」
「おう、それくれぇだろうよ」
そんなふたりを、のぶは夕餉（ゆうげ）の片付けをしながら見ていた。
こんなときのぶは、自分はこの江戸の町で一番幸せなのだという気分になる。
あれこれ言いながら朔太郎の絵を見ている晃之進は、すっかり父親の顔だ。事情を知らない者からしたら、血が繋がっているように見えるだろう。
ここへ来たばかりの頃は、のぶばかりにべったりだった朔太郎も、今やすっかり晃之進を『とと』と呼んで慕っている。
子ができないことをつらく思ったときもあったが、それもこれもすべて朔太郎を迎

えるためだったのだと今は思う。
「おお、すげぇ。さく、お前天才じゃねぇか。こんな感じだったんだろうよ。おい、のぶ見てみろ」
呼ばれて手を拭きながら半紙を覗き込み、のぶは「わ」と声をあげた。
「今にも動き出しそう」
半紙の中の三毛猫は、耳が大きくやや鋭い目つきでこちらを見ている。飯をくれ、くれないと飛び出して引っ掻いてやると言わんばかりである。
のぶは大黒屋の三毛猫を見たことはないが、晃之進が聞いた特徴がその通りなのであれば、こんな猫なのだろう。
同じことを晃之進も考えたようで、「写し絵を作って菊蔵にも持たせよう。すぐに見つかる」などと言っている。
のぶも得意な気分になる。けれど。
「おう、さく、絵を習って下手人の似顔絵を描いたらどうだ？」
その言葉には、眉をひそめる。
「ちょっとお前さん、物騒なこと言わないでくださいよ」
親の生業（なりわい）を子が手伝うのはよくあるが、それが同心の手先となると厄介だ。物騒な方向に行きかねない。

朔太郎が本気にしたらどうするのだ、とぷんぷんしたが、朔太郎は首を横に振った。
「おいらは、田楽屋になる」
「お、そうけぇ」
ここのところ朔太郎はよくこんなことを言う。周りが後継だ後継だと言うのを聞いているからだろう。
「近所の連中も喜ぶだろうよ。かかさまの田楽は三日にいっぺんは食べないと気が済まねえという連中が大勢いるからよ」
朗らかに笑ってそう言う晃之進に、朔太郎が「おう、まかせろ」と鼻を膨らませる。
のぶの胸はうれしい気持ちでいっぱいになった。
田楽屋を始めたのは成り行きだ。けれど「のぶさんの田楽は天下一品よ」と客に言われると誇らしい。自分は死ぬまでこの場所で田楽を焼き続けようと考えている。
その商売を自分の子に継ぎたいと言われて、うれしくないわけがない。
「頼りにしてるよ」と声をかけると、朔太郎がへへへと笑った。

「それにしても、子はかすがいとはよく言ったもんだね。あのぼうやが来てから、こ

うさんの姿を家でもよく見かけるようになった。湯屋にもよくふたりで来るから、うちの連れ合いがびっくりしてるよ」

店じまいをするのぶの傍らで、麦湯をすすりながら大きな声で捲し立てるように話しているのは、近くの裏店に住む建具屋の妻、つねだ。

彼女は口を開けば噂話か、嫌味しか言わないので、この界隈では少し邪険にされている。

のぶに関する不名誉な噂、駆け落ちしてまで一緒になったのに、亭主がうちにいつかない可哀想な女だという陰口を率先して触れ回っていたのは彼女である。

朔太郎がここへ来てからは、『のぶさんはこの子を大切にしなければいけないよ。子が産めないうえに、大事な男の子をいじめたのならばバチがあたるからね』とことあるごとに嫌味を言う。

正式に朔太郎を引き取る前は適当にあしらっていたが、今はそうもいかないのがつらいところだ。

お互いの子ども同士は仲良しで、よく裏の通りで遊んでいるからだ。

「それで、あっちの寺子屋の先生はどうだい？　のぶさんがわざわざ遠くまで行かせるくらいだ、さぞかし立派な学問を教えるのだろう」

ここのところちょいちょい店にやってくるのは、この話をしたいからだ。

立ち読みサンプル
はここまで

彼女はのぶがこのあたりの子が通っている西念寺の寺子屋へ朔太郎を入れず、又三郎のところへ入れたことが気に食わないようだ。

彼女の子は皆西念寺に通っているから、自分のやり方を否定されたように感じているのだろう。

「のぶさんはぼうやを育てるのに熱心だから、西念寺の寺子屋じゃ、物足りないのはわかるけど」

「つねさん、何度も言ってるじゃないですか。朔太郎を伊勢崎町へやったのは西念寺さんのところが足りないからとかそういう理由じゃないって。朔太郎はうちの人の親戚筋の子ですから、私の一存では決められなかったんですよ」

「どうだかね。去年はのぶさん、このあたりの寺子屋の評判を聞いて回っていたじゃないか」

「それはそうですけど」

わが子をどの寺子屋へ通わせるのが一番いいか悩むのは、当たり前ではないだろうか。

それでなくてものぶは朔太郎を四歳の頃に引き取った。自ら産んで育てていたほかの母親たちより不慣れなことが多いはずで、その分、寺子屋選びは責任重大だと気合が入っていたのだ。